

# いづれも浮世絵しんぶん

江戸時代の人々は遠くまで

旅をするとき、どうしていたの

でしようか。現代のように電車

や車は当然ありません。多く

の人は、歩いて目的地へ向かっ

ていました。たとえば、東海

道の日本橋から京都までを歩

くと、だいたい2週間ほどかか

っていたようです。途中で災害

や事故に遭ったり、寄り道を

したりなどすれば、もっと時間

はかかります。

多くの人々が旅できるように

なったのには、道が整えられた

からという理由があります。

街道やその途中にある宿場が

## 東海道の途中にはなにがある？

藤沢市  
藤澤  
浮世絵館

2023年  
3月  
第16号



歌川広重「東海道八五十三次之内平塚」



東海道を描いたシリーズはたくさんあります。どれも似た名前前で売られていたので、後の時代の人たちが区別するために愛称をつけました。今回紹介するのは、葛屋吉蔵という人が出版したことから「葛屋版東海道」と呼ばれています。

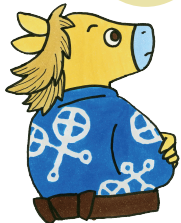
整えられ、利用しやすくなつたのです。橋や旅人のための休けい所、道標（道しるべ）なども道の整備といえるでしょう。交通が整えられたことで、大変な道も少し楽に移動することができました。

今の生活も信号や道路標識、線路など交通に関係するものが身近にたくさんあるよね。江戸時代の道には、人々が快適に通るために、どのようなものやサービスがあったかな



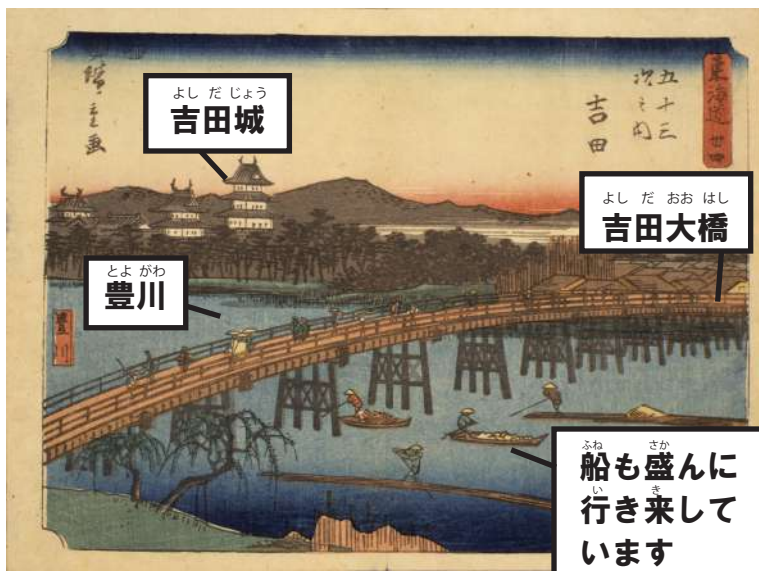
はし わた おいわけ えが うきよえ しょうかい  
**橋・渡し・追分の3つが描かれた浮世絵をそれぞれ紹介します。**

画面いっぱい描くことで橋の長さを伝えているね。



浮世絵に描かれる交通としてよく見られるのは、橋です。この浮世絵には、画面いっぱい大きな橋がかかっていきます。その長さは20間で、今の単位に直すと、20メートル! 豊川に架けられた吉田大橋には、たくさんの方が描かれていて多くの人に利用されていたのがわかります。

よしだ あいちけんとよはしし  
**吉田(愛知県豊橋市)**



うたがわひろしげ どうかいどう さんじゅうよん ごじゅうさんつぎのうち よしだ 歌川広重「東海道 三十四 五十三次之内 吉田」

おだわら  
**小田原**

江戸時代は橋が架けられていない川もあり、渡るためには舟や人の力を使うこともありました。大磯と小田原の間にある酒匂川には、人や荷物を運ぶ職業の川越人足がいました。川越人足が肩車をする「徒歩渡し」や、蓮台という乗り物に乗る「蓮台渡し」で川を渡る様子が描かれています。人足に渡してもらったためにお金が必要でしたが、渡る方法や水の深さで値段が変わりました。



うたがわひろしげ どうかいどう じゅう ごじゅうさんつぎのうち おだわら 歌川広重「東海道 十 五十三次之内 小田原」

ふじさわ  
**藤沢**

「追分」と呼ばれていた交差点のようすが描かれています。この場所は藤沢浮世絵館からほど近い「四ツ谷」という地域で、今も地名が残っています。四ツ谷は、東海道と、大山へ向かうための大山道が交わっていたため、この浮世絵にも多くの旅人でにぎわう様子が描かれています。右側の建物は「立場」と呼ばれる休けい所で、一休みをする人の姿が描かれています。左はしの「道標」は道しるべで、今も残っています。



うたがわひろしげ どうかいどう しち ふじさわ よつや たてば 歌川広重「東海道 七 藤沢 四ツ谷の立場」

人々が使いやすい道づくりが行われていたことが、これらの浮世絵を見て分かったよ。旅を支える設備やルールは地元の大きな協力あってこそだね!  
 これらの浮世絵は2023年4月23日(日)まで展示中!  
 他の浮世絵に描かれたものもぜひ見てみてね。



開催中の展示  
**【開催中の展示】**

鳥屋版東海道と追分道の文化  
 ひろしげ しかく ついせう  
**広重 <視角> の追求**  
**「橋、渡し、追分」**